

唯物史観より人口史観へ（Ⅶ）

—— マルサス批判に答えて ——

別 府 芳 雄

まえがき

前章では“マルサス対マルクス”，すなわちマルサスの人口思想とマルクスの人口思想を対比して述べた。マルクスの“マルサス批判”は——甚だ失礼ながら——大哲学者にして大経済学者たるマルクスとは思えないくらい感情的で攻撃的で冷静さを欠いたマルサス攻撃ともいうべきものであった。★

★ マルクスは『資本論』第1巻第7篇第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」においていう——「マルサスは、その偏狭な考え方によって、過剰人口を労働者人口の絶対的な過度増殖から説明しており、労働者人口の相対的な過剰化からは説明していない」（Das Kapital. Erster Band. S.663.邦訳『全集』第1巻826ページ）。「マルサスの著書は、その最初の形では、デフォー（Defoe）やサー・ジェームズ・ステュアート（Sir James Steuart）やタウンSEND（Townsend）やフランクリン（Franklin）やウオレス（Wallace）などから生徒のように上っただけで坊主のように暗唱するだけの盗作以外のなにものでもなく、自分で考えた命題はなに1つ含んでいない」（ibid., S.644.邦訳804ページ）。また『剰余価値学説史』第19章（第3分冊）「T. R.マルサス」（T. R. Malthus）においては「マルサスの『人口について』の本は、フランス革命とイギリスにおける当時の改革思想（ゴッドウィンなど）に反対する1パンフレットであった。それは労働者階級の貧困の弁明書であった。理論はタウンSENDなどからの剽窃である。彼の“地代に関する論文”は、産業資本と対立した地主のための1パンフレットであった。理論はアンダーソン（Anderson）からの剽窃である。彼の『経済学原理』は労働者と対立して資本家の利益を擁護し、また資本家に対立して貴族や税金食いや従者などの利益を擁護する1パンフ

レットであった。理論はA.スミスからの剽窃である。彼自身の独創部分はみじめ (jammervoll) なものである。理論のさらに進んだ議論のなかでは、シスモンディ (Sismondi) が基礎になっている」(K. Marx, Theorien über den Mehrwert—Vierter Band des “Kapitals”—Dritter Teil, Neunzehntes Kapitel. T. R. Malthus. 14. Der apologetische und plagiatorische Charakter der Schriften von Malthus. M. E. W. Bd.26.3. S.56.『全集』第26巻Ⅲ. 時永 淑訳72ページ, 傍点はすべて訳者)と述べ, また1851年1月7日付エンゲルス (在マンチェスター) あての手紙では, 「1口で言えば, 人口が土地からより多くを取らなければならなくなるのに比例して, 土地は劣悪になって行く。土地は相対的に不毛になって行く。マルサスはこの点に彼の人口論の現実の地盤を見いだした。そして, 彼の弟子たちは今ではこの点に彼らの最後の頼みの綱を求めている」(『全集』第27巻良知 力訳142ページ)と述べている。エンゲルスにいたっては『人口原理論』を酷評するあまり「この下劣で軽蔑すべき学説 (diese infame, niederträchtige Doktrin), 自然と人間にたいするこの恐ろしい冒瀆 (diese scheussliche Blasphemie)」(F. Engels, Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie, M. E. W. Bd.1. S.518.『全集』第1巻562ページ), 「気違いじみた結論」(wahnsinnige Resultate) (ibid., S.519.邦訳563ページ)といい, 「ここにいたって, 経済学者の不道徳性はついに絶頂に達した」(ibid., S.518.邦訳562ページ)と述べたばかりか「イギリスにおける労働者階級の状態」(1845年3月)においては, マルサスの人口理論は「プロレタリアートにたいするブルジョアジーのもっともあからさまな戦争布告 (Die offenste Kriegserklärung der Bourgeoisie gegen das Proletariat)」とさえ述べた。(F. Engels, Lage der arbeitenden Klasse in England: Stellung der Bourgeoisie, M. E. W. Bd.2. S.493.『全集』第2巻519ページ)。だが, 考えてみると——この毒舌的批判は痛烈ではあるが, 余りにも露骨で感情的であるから返って読者に反撥を与えてしまうおそれを感じる。

マルクスがマルサスを反駁しようとする気持ちはよくわかる。わかり易くいえば, もしマルサスのいうように貧困が人口法則という自然法則にもとづいているとすれば, 社会改造などは当然できなくなってしまうからである。★

★ マルクスは社会主義者になって [パリ時代] からのち, 約2年くらいたってから唯物史観を考え出している [ブリュッセル時代]。だからどうしても唯物史観では資本主義体制の必然的崩解を宣告しておく必要があった。もしマルサス

のいうように“道徳的抑制”で社会将来の改善ができるとすると——唯物史観そのものがムダになってしまう。マルクスの全理論の運命がかかっているのだからこのような激怒の感情のあまり、暴言となって飛び出たものに違いない。

だからマルクスとしては人口法則を社会的・歴史的法則として樹立する必要があった。（ただし人口を歴史的に捉えるという着想はみごとで確かにスバラシイものであった。）マルクスによれば、人口法則は時代によって異なるもので、封建社会には封建社会特有な人口法則があり、資本主義社会には、その特有な人口法則がある。ところが資本主義社会の人口問題は帰するところ雇用の問題であって雇用状態が人口に比較して、どうあるかが人口の過剰または不足となって現出する。つまり資本主義においては雇用はいつも不足しているから、人口はいつも雇用に対して相対的に過剰となる。その過剰人口が産業予備軍として存在することになって、それが労働者の賃金を圧迫して資本蓄積を促進することになる。これは資本主義的生産組織の結果で、けっして自然現象ではない。この資本主義的経済秩序さえ改めれば人口問題は解決されるというのがマルクスの主張であった。

しかしボーエン (I. Bowen) がハッキリ述べているように「マルサスの命題が非人間的であり、非科学的であると指摘するだけでは、その命題を論駁し、あるいは葬り去るのに十分ではなく、また現に十分ではなかった。歴史の記録を調べれば、マルサスの命題が根強いものであり、永続性をもつものであることをある程度理解できるであろう。そのままの学説としてであれ、また受け入れ易いかたちに鋳直されたものとしてであれ、マルサスの命題はこれまでの長い論争においてみられたのと同様に、近代においても、そのもっとも抵抗しがたくまた魅力のないかたちで再登場し続けている」(I. Bowen, *Economics and Demography*, p.83.) ——ものであって、現代においても、マルサスの提起した問題は氷解することなく、再登場し続けているのである。「プリンストン会議 (Princeton conference) で、生物学者エールリッヒ (Ehrlich) 教授は、冒頭に、“この地球は何人の人間を

扶養することができるか、そしていかなる条件の下において”という問題を提起した。だれもこの問題に正確かつ詳細に答えることはできなかった……アジア、アフリカおよびラテン・アメリカの膨大な人口の死亡率はさらに低下しており、また年齢分布は人口増加を促進するようなパターンをもっており、出生率がかりに大幅に低下したとしてもその効果を相殺するほどのものである……それほど大きな人口があらわれたとき、その生活状態がどうなるのか、プリンストン会議の参加者はだれも予告することができなかった」(I. Bowen, *ibid.*, p.21.) くらいで——「マルサスが偉大な経済学者であったことは、彼の『経済学原理』を見ても、または著名な彼のいくつかの論文を見ても、すぐにわかる」(C. Gide, *A History of Economic Doctrines*, p.135) ことであり、マルサスが“社会学の父”といわれている人物であり、マルサスの初版『人口原理論』を読んでダーウィン(Charles Robert Darwin 1809-1882)が“適者生存”の原理を思いついたことなども——いまや予備校生の常識である。けっして頭ごなしに単純に暴言をもって罵倒すべきものではない。『人口原理論』が「1世紀以上も経過したのちの現代においてさえ、その著作が惹きおこした論争の反響が未だに消えていない」(C. Gide, p.135-6) ことは“知らぬものなき”事実であって、しかも“誰も答えられない”問題なのである。繰り返していうと——マルサスの提唱したMan-Land-Ratio(人口-土地比率)は人間実存の基本問題であって、マルクスのというような単なる雇用の問題などでなくて、もっと根深い問題であって、人口と生活空間(=人口扶養力)との間の緊張関係(Spanungsverhältnisse)がマルサスの提起した問題だからである。だから「いかに多くの批判がなされようとも——人口の圧迫とそれを支える手段との間の必然的緊張に関する彼の見通しは正当であったし、それは彼の時代以前の状況に関するいかなる研究に対しても適切なもの」(E. A. Wrigley *Population and History*. 1981. p.53.) だったのである。

かってミック(Ronald. L. Meek)が“Marx and Engels on Malthus”

1953（『マルサス批判』大島 清，時永 淑共訳，昭和34年，法政大学出版局）と題してマルサスを批判し，また近年，中国の王放勛氏が『マルサス「人口論」と新マルサス主義批判』（上海人民出版社，1978，鈴木幹夫訳，市原亮平編著『〈人口論〉と中国人口問題』，1981年，晃洋書房刊）と題して，マルサスを批判論駁しているが——率直に言って，筆者には納得できない。そのほかにも，むろんマルサス批判の書物は沢山ある。確かにマルサスは“彼の時代の最も多く悪口された人”であり，彼の『人口原理論』は“何人にも読まれることなく，すべての人が悪口をいう”著作であった。だからマルサスは彼の生存中においてすら，彼の『人口原理論』第4版「付録」において，『人口原理論』に対する批判に答えて反論を詳しく述べている。（『マルサス人口論』Ⅳ，吉田秀夫訳，古典経済学叢書，春秋社，209-291 ページ参照）。また人口動態の研究がけっして近年に始まったものでもないことも事実である。しかしマルサスは誰が考えても明白であるにもかかわらず，一般に等閑視されている事実を『人口原理論』初版においては率直に訴え，第2版以後では，帰納的歴史的考察（統計的資料も加えて）にくわえて人口学的歴史観を構想するにいたったことはまことに偉大な業績といわねばならない。多くの批判者はマルサスの特異な史観すら顧ることなく，表面の“人口”論のみをとりあげて浅薄な批判をしようとしている。これは誤りである。単に誤っているばかりでなく，マルサスにとって甚だしく迷惑である。★

★ マルサスの『人口原理論』は——「人口問題を自己目的としてあらゆる側面から照明しようとした概論書ではない。照明の対象はむしろ，人口問題ではなくて社会問題であり，その照明の手段が人口の原理であった」（Budge, S. Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz und theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte, Karlsruhe. 1912, S.6.）ことを銘記しておく必要がある。（傍点引用者）。

しかも——その批判の激しさと毒舌の巧みさからいうと前記2著はすこぶる峻烈である。(マルサスに対する認識不足のせいで余計、暴言だけが峻烈である。)たとえばミークはいう「マルサスの『人口原理論』の著作は、フランス革命とイギリスにおける当時の改革思想(ゴッドウィンら)に反対する1つのパンフレットであった。それは労働者階級の窮乏にたいする1つの弁明(an apology)であった。その理論はタウンセンドから剽窃(plagiarism)されたものである」(p.168.邦訳217ページ、傍点引用者)。[★]

★ タウンセンド(Joseph Townsend 1739-1816)は『救貧法論』(A Dissertation on the Poor-Law 1786)で南洋の孤島の動物について繁殖の波をえがき、また救貧法が労働者人口の増加をもたらすから、救貧の目的に反することになると述べ、“自然界の均衡”の思想を述べた。

「マルクスとエンゲルスにとっては社会変動の基礎的法則を発見すること、とくにブルジョア社会の“運動法則”を発見することが関心事であったから、彼らにとっては、資本主義のもとにおける過剰人口のごとき社会現象を“永遠の法則”という言葉で説明することが浅薄で不適當だと思われたのは当然であった。この点こそ、マルサスの人口論にたいする両者(マルクスとエンゲルス)の主なる一般的批判の基礎」(p.25.邦訳25ページ)と述べ、「マルサスは要するに“職業的ひょうせつ家”」(p.116.邦訳148ページ)であったのであって「マルサスに特徴的なことは、その心情が根本的に卑劣(meanness)なことである。その卑劣なことは、ただ僧侶(parson)だけが許しうるものである」(p.116.邦訳161ページ)とも述べているが——これらはマルサスの人口理論に対する誤解にもとづく発言であるばかりでなく、マルサスその人に対する個人攻撃である。(心情卑劣などという反論は論理外。)ことに、マルサス自身が、第4版の付録で「私をもって人口の敵なりと推論するのは私の議論を全く誤解せるものである。

私は単に罪悪および窮乏の敵であるにすぎず，したがってまたこれらの害悪を生む人口と食物との不利な批判に対する敵であるにすぎない」(*An Essay*, 4th. ed. The Temple Press Printers, Letchworth. 第4版付録，吉田秀夫訳，古典経済叢書，春秋社209ページ)と述べ，第6版では「私が確立しようと努めた諸原理が誤りであるならば，私はそれが論駁されることを心から望んでいる」(*An Essay*, 6th. ed. Book II . Chapt XI Everyman's Library 1973 p.159)とまでいっているのに非礼な暴言で報いるのは，読者として不可解な話である。★

★ マルサスは初版第1章では——私がこれから述べる議論は決して新しいものではない。その基礎となっている原理は，すでに或る程度において，ヒュームの説いたところでありアダム・スミス博士のさらに詳細に説明したところである。そしてまたウオレスが早くもこの問題に応用した，と述べ，第2版序文においては——本研究の進行中に私は，本論文の初版刊行当時に承知したよりも，はるかに多くのことがなされていたのを見出した……しかも近年にあっては本問題は若干のフランス経済学徒により，おりに触れてはモンテスキューにより，そしてわが国の作家のなかでは，フランクリン博士，ジェームズ・ステュアート卿，アーサー・ヤング氏およびタウンSEND氏によって論じられたところであって，その論態たるや何ゆえに公の注意を激成しなかったかという当然の驚きを生じさせるほどである——と述べて，これら先人の業績を十分に参照したことを公表している。(初版『人口の原理』高野岩三郎，大内兵衛訳，岩波文庫，第2版は『人口論』(Ⅱ)吉田秀夫訳，春秋社)

次に，市原亮平氏編著の『〈人口論〉と中国人口問題』(晃洋書房)では「マルサスの『人口論』(1798年)はイギリス階級闘争が日増しに鋭くなり，社会的危機が日増しに深刻となった時に世に出された。この鼻もちならぬ著書は過去の別の人物による人口増加は生活資料の増加よりも速いという唯心論的形而上学の観点を剽窃し，編集したものである。マルサスは……ブルジョア階級がプロレタリア階級を残酷に抑圧し，奴隷のように酷使することを隠蔽し，資本主義的搾取制度を強固に弁護するために利用した。マルサスは資本主義的私的所有制度が人口増加と生活資料増加のバ

ランスをとる最も有効な制度であり、人類の英知を発展させ、また品性と徳性を養い高める最良の制度だと美化した。マルサスは、社会発展を決定づける根本的原因は人口にあり、社会的生産様式ではないとでたらめをいった。彼は人口はある種の災禍であり、勤労者大衆はただ消費者であるだけだとみており、人口が多ければ消費も多いと考え……一言でいえば、マルサスは当時のイギリスの最も反動的で残忍なブルジョア俗流経済学者であった」(前掲書4ページ、傍点引用者)と述べ、「マルサスはプロレタリア階級をののしり、軽蔑し、さらには、貧しい勤労人民は“運命として”前述の“永久自然法則”の支配を受けなければならず、永遠に“餓死、殺人および種の絶滅”という悲惨な境地にあるのだと極めて凶暴なことを述べている。すなわち、貧しい人間は“金のさじをくわえないでこの世に生まれてくるほどの無分別”であるから。マルサスは、資本主義社会が作りだしたすべての困難、災害と罪悪の原因を、資本主義社会の基本矛盾にそれを求めず、また、“その現象が特定の歴史的に規定された社会的経済体制から発生することをまったく否定し、またこの事実によって暴露される諸矛盾に対してまったく目を閉じて、その現象を自然史的な原因によって説明しようとした”。マルサスは、もし人類に無制限な増殖本能がなければ、人口問題というような災禍は存在しなかったと世を憂うように考えていた。したがって彼が提起した解決方法とは、道徳的抑制、疾病そして災害(戦争を含む)という3種類の道を通じた“多過ぎる”人口の消滅であった。“多過ぎる”人口を消滅させるために、マルサス信徒のひどいものになると極めて残忍な手段の採用を主張し……あたかも労働者階級の人口増加を制限することが資本主義社会を“繁栄”させるかのようである。したがって彼らの得た結論というのは、“労働者が結婚せず、子供を生まない”ことは“黄金の道徳”であるというものである」(前掲書26-7ページ)と述べ、結論的には「マルサスこそは、イギリスの当時における最も凶悪なブルジョア俗流経済学者であった」(同書20ページ)と

述べたばかりか、さらに“まとめ”として「現在の世界各国の社会経済状況は異なっており、各々の社会経済制度はすべてにそれ特有の人口法則をもっており、各国が人口政策を制定し実施することは、まったく各国の内政と主権に属するものであり、ある国では人口増加率を適当に下降させねばならず、ある国では人口増加率を適当に上昇させねばならないが、それは各国政府が自国の具体的状況にもとづいてみずから決定しうるものであり、一律に強要しうるものではない」（同140ページ、傍点引用者）と論断しているが——しかし筆者には、とうてい納得しがたい。というのは、こんにち「われわれの時代の中心課題は不断に増大する人口問題に世界がいかに対処するかという問題」（L. R. Brown, *In the Human Interest*, Pergamon Press, 1976. p.11）であって「人口増加持続の諸結果は、その増加が実際にどこにおいて起きているかに関係なく、〔地球上の〕すべての人びとに影響を与える」（*ibid.*, p.13）ことになっているからである。人口問題は地域科学（Regional Science）の重要な分野になっているのだ。1963年のFAO〔食糧農業機構、1945年10月設立、本部はローマ、加盟国156ヵ国〕の第3回食糧調査報告によると「一般的にいて、栄養状態は、著しく改善されたが、世界中の栄養不良の人口が今日ほど膨大な数に達したことはいまだかつてなかったことも確かな事実である。約5億の人口が栄養不良状態にあり、2億の人口が食物不足に悩んでいる」（FAO. *Third World Food Survey. Freedom from Hunger Campaign, Basic Study II*. Rome, 1963. p.51）——という報告をみても論者たちの主張は人口問題の普遍性（国際性）を忘れた空論であるという他はない。昭和46年11月1日から12日の間、開催された第16回国連人口委員会の中心課題が *globalism* であったことを考えると——論者のいうような“人口問題は各国政府が自国の具体的状況にもとづいてみずから決定しうる”——という結論は誤りであることがわかる。

それにしても、これらマルサス批判者たちの批判論を読んで感ずること

は、まあ何という浅薄なマルサス理解不足の論評であろう！ いったいこのような論者たちは『人口原理論』第6版、第2巻、第4編第13章「この問題に関する一般的原則の必要性について」(Of the Necessity of general Principles on this Subject)の章を読んで下さったことがあるのだろうか。この章でマルサスは以下のようにハッキリ書いている。「人は結婚すれば何人の子供を持つようになるかわからないし、多くの人は6人以上も持つので、この程度の慎重さでは必ずしも役に立たないといわれるかもしれない。このことはたしかに正しいし、私は、この場合6人を越える子供にすべて一定の手当(certain allowance)を与えても、何ら害悪が生ずるとは思わない」(An Essay, 6th. ed, Book IV. Chapt. XIII. Everyman's Library, Reprinted in one volume 1973 p.255)「もし私が首尾よく本書の主旨を読者に理解させることができれば、この国の扶養しうる以上の子供を産むべきではないと私が考える明確な理由は、生れてくる子供をできるだけ多く扶養したいからだということに読者は気づくことであろう」(ibid., p.252, 傍点引用者)と述べているではないか。★

★ この点、ジイド(C. Gide)の説明もよく承知しておいて貰いたい。「されど、世人の信ずるところに反し、またこんにち新マルサス主義者らの教えているところに反し——マルサスは決して結婚後における産児制限などを唱えたことはなかった。道徳的抑制は事前(結婚前)におこなうべきものであって、事後(結婚後)におこなうべきものではない。マルサスは6人の子供をもって標準数となし、しかもこう書いている。“夫婦はこれ以上の子供をもつかも知れないから”だと。(『経済学原論』宝文館、大正8年、飯島幡司訳101ページ)

また、イングラムの以下の解説もよくマルサスの真意を伝えている——マルサスは1家族に6人以上の子供のある時は1人ごとに国庫(public funds)から補助手当(allowance)が支給されるようにするがいいと述べている。(J. K. Ingram, A History of Political Economy p.116)

「マルサスが当時の経済思想に与えた衝撃は、D.E.C.エバーズレー(Eversley)が指摘したように“偶像の権威の崩解”に似たものがあった」

(I. Bowen, p.77) というではないか。しかも、こんにちの問題はマルサスの時代と少しも変わっていないのである。「われわれのみた人類の歴史は、いずれの時代においても土地をめぐり、食物をめぐり、生きる生活空間をめぐっての闘争をくりかえしたことをしめしている。生活空間は経済の開発につれて拡大し、人口の側においても意識的な統制に服する要素が非常に多くなってはきたが、個々の国としても世界全体としても、ひろい意味における人間＝土地比例の問題は依然として姿を消してはいない。ヨーロッパのある国々はかりに近い将来ふたたび減退人口の問題をおこすことになるにしても、世界人口の80%の国々は人口を増加していき、世界全体としての増加趨勢は今後まことに顕著なものがあると予想される。人口と生活空間の問題はいよいよ世界的な規模でたちあられざるをえない。人口問題には普遍性があるのである」(『人口大事典』平凡社、21ページ)のであって、現代こそ“人口問題”が大きな意味をもっていることを承知しておく必要がある。「無知、偏見あるいはその他の好ましくない事情のために予防的制限がほとんど働かないところでは、また、食糧生産が増加できないところでは、1870年代にバングラディッシュで起ったように悲惨な貧困がまさに予測どおりに発生する」(I. Bowen, *ibid.*, p.79) ものであって、人口政策にしても、もっと地球全体の規模で考える必要がある。(そうでないと必ず紛争をもたらすことになる)。そう考えると、各国の人口問題の解決は各国の内政と主権に属する問題——などと単純にいい切れるものではない。いいかえると「マルサスの偉大な貢献はお世辞や誤まった代弁によって矮小化されてはならない」(I. Bowen, *ibid.*, p.80.) のである。

今回は、これらマルサス批判者たちの認識不足の暴論について少しく批判していくことにしよう。

マルサス『人口原理論』批判に答えて

I 驚いたことには——関西大学教授・市原亮平氏編著『〈人口論〉と中国人口問題』の「目次」をみると——“前編，マルサス『人口論』と新マルサス主義批判”——となっており，マルサス主義もネオ・マルサス主義も一括して論断していることである。★

★ ミークも「もっと陰険 (subtle) で，詭弁的 (sophisticated, ごまかした) で，したがってヨリ危険な“ネオ・マルサス主義者”があり，彼らはいわゆる“科学のジレンマ”を見せつけるためにマルサスの学説を使う」(R. L. Meek, Marx and Engels on Malthus, p.42) ——と述べ，ネオ・マルサス主義がマルサス主義と全く別の物であることを理解していない。

前述のように，マルサスは産児制限などを提唱したことは全くない。マルサスは妻子扶養の資がえられるまで結婚を延期する必要があるとはいつたが，結婚後における産児制限などは認めなかった。それどころか，1家に6人の産児のある場合を想定して，国庫からの補助手当の必要さえ述べている。イングラムはこの点についてわかり易いように，しかもハッキリと解説している。すなわち「家族を扶養するに必要な食糧を獲得しないか，もしくは獲得する正確な見込みのなきものは結婚してはならぬということマルサスが提唱した唯一の義務であった。J.S.ミルとかその他の人びとがそののちになって説いた結婚後の抑制 (post-nuptical continence) [産児制限など] はマルサスの意見とは違った別のものなのである。マルサスは1家族に6人以上の子供がある場合は1人ごとに国庫からの補助手当が支給されるべきことを示唆しているが——これは結婚後，何人子供ができるのか予測できないから，このような補助金の支給を必要とするのだが，[だからといって] こういう補助給付が結婚奨励の作用をすることは¹⁾ない」と述べている。

ところが、新マルサス主義は道徳的抑制でなしに産児制限を提唱する。繰り返していうと、マルサスのいう道徳的抑制とは出生すべき子供を養うに足（た）る経済力をもつまで結婚を延期し、そのあいだ性的純潔の生活を維持することである。したがって産児調節の思想とは一致しないものである。それどころかマルサスは産児調節の思想を排斥しているのである。マルサスは「性的交渉を自由にやりながら、人為的避妊の方法をとろうとする人びとの主張と全く反対²⁾」で「こんにちマルサスという名前を使って宣伝している方法（ネオ・マルサス主義のこと）を仮借なく拒否した³⁾」ことは常識である。★

★ マルサスはいふ——道徳的抑制の作用すなわち「予防的妨げのこのような作用は、人口を食料の限度内に絶えず抑止しているの、絶えず、食料の増加の後を追ってはいるけれども、賃金の上昇と結婚前に労働者が貯蓄した金額とに実質的な価値を付与」（T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 6th. ed., Book IV. Chapt. II. p.161 邦訳542ページ、中大出版部）するから「すべての赤貧（all abject poverty）が社会から除去され」（ibid., p.161 邦訳542ページ）ることになる。また「早く結婚しない慣習（the custom of not marrying early）が一般的に広まり、純潔を汚すことが男女ともにひとしく恥すべきこととされるならば、一層親密で友情に満ちた両性間の交際が危険を伴わずに行なわれるであろう」（ibid., p.162 邦訳543ページ）。結婚するに当って、妻子を扶養すべき所得のえられないのに結婚するということは「泳げない人を無理に水中に入れるのと同じ」（ibid., Chapt III. p.171 邦訳554ページ）で、無分別で神意に反する行為なのである。それは、ちょうど「亀（tortoise）に兎（hare）を捕えさせるようなもの」（ibid., p.172 邦訳555ページ）ともいえる。それゆえ「自然の法則から食料を人口に釣り合わせるができるとわかれば、われわれの次の試みは当然人口を食物に釣り合わせることでなければならぬ。もし兎を眠らせることができるならば、亀が兎に追いつく見込みも多少あるかもしれない」（ibid., p.172 邦訳555ページ）と思うほどである——と。

前記の悪意と暴言にみちた論者らは一括して論ずることができないマルサス主義とネオ・マルサス主義をあえて一括して批判しようとする。果して、論者らの真意はどこにあるのか。それとも単にマルサスに対する理解

不足のせいだけなのであろうか。★

★ 念のため——玉井茂氏は「新マルサス主義に言葉として、マルサスの文字をいまなお冠するのはやや不適當であって、むしろアメリカ流に単に産児制限論 (Birth Control Theory) という方が誤解を招くおそれが少い」(『人口思想史論』清水書店、大正15年、335ページ) と述べていることを付記しておく。

Ⅱ マルクスはマルサスを誹謗して“抽象的人口法則は——人類が歴史的に干渉せざる限り——ただ動植物にとってのみ存在する”と述べた。つまり人口を人口対生存資料としてでなく、人口対資本として、あるいは人口対労働需要として見るべきことを主張し、資本は歴史上の特定の社会においてのみ主役を演ずるものであるから真実の“人口法則”はただ特定の社会においてのみ妥当するものとして樹立さるべきであると述べた。すなわちマルサスの人口理論(人口対扶養力の関係を論じた人口理論)を抽象的人口理論と論断し、人間社会には歴史的人口法則があるのみという。だが、注意ぶかく読むならマルサスの『人口原理論』は歴史的段階における人口の現実の扶養力を述べたものであり、——いつの時代でも、またいかなる社会でもおなじ形で発現するもの——などとマルサスは述べたことはない。マルサスは国々の経済的発展段階をたんねんに顧慮しつつ、そのおのおのの段階における人口の現実の扶養力を論じているのである。繰り返していうが、マルサスにおける人口とは「社会からぬき去った抽象的人口ではなく、食料もまた分配関係からぬき去った抽象的食料ではない。それゆえ食料対人口という形で表現されたマルサスの問題は、あらゆる社会的・歴史的諸条件を除き去った“絶対的”人口問題ではなく、じつは、これら諸条件のもとにおいてのみ生成変化する歴史問題としての人口問題⁴⁾」であったのである。

具体的でわかり易い救貧法改正の問題をとりあげて述べてみよう —— 「久しく多数の失業者や下層の労働者にたいする生活扶助や賃金補給の役

割をつくしてきたイギリスの救貧法は、その費用負担の点において、しだいに土地所有者層の不満的になっていった。34年の改正救貧法は、この比較的広汎で、手厚い過剰人口の保護を打ち切って、老者、病者のごとき働けない極貧者以外のものの国家扶助を廃止することによって、彼らを“労働”に追いやり、それによって救貧院の負担を軽減しようと企図したものであった。ところで改正法は、いわゆる従来の“働く貧民”を上下の2層に分解して、上層部分を救貧扶助の圏外に放逐し、彼らを普通なみの賃金労働者に誘導し……“院内救助”の対象にしようとした。ところでこの計画の精神的企画者は、ほかならぬロバート・マルサス Robert Malthus (1766-1834)⁵⁾であったわけで、マルサスは抽象的な人口法則ばかりを述べているのではない。ボーエン (I. Bowen) によれば——「貧民救済に対するマルサスのよりの確な攻撃は、金銭をいかに分配しても、貧民の一般的生活水準を高めることはできないであろうという主張とともに開始された。彼（マルサス）のいうところによると——1日16ペンスを稼ぐすべての人びとに5シリングずつ与えた（富者からの寄付によって）としても、その結果は食物の価格が高まるだけであろう。そのうえ仕事は減少するであろう。そして実質賃金は結局のところ低下するであろうと述べた⁶⁾」のであって——マルサスはその時代の具体的問題について彼の人口理論を具体的に援用しているのである。

またボナー (J. Bonar) によれば「1795年には食物の大欠亡があり、戦争価格 (war prices) は飢饉価格 (famine prices) となっていた。その年は下層階級が特別の鎮圧法 (coercions acts) によって弾圧された年であった。それは国王の馬車が“パンを、パンを！”と叫ぶ暴徒によって止められた年⁷⁾」でもあった。この時、マルサスのなすべきことは「近代の社会を向上せしめるための信じうべき方法、おなじく思い違いをしている方法は何であるか。さらに貧民を救済するための正しい方法、間違った方法は何であるかを述べること⁸⁾」であったわけで、「人口論の成功は、ここまでは、極め

て顕著なるものがあった……1800年2月11日の下院における討論で、ピット（Pitt）は機会をとらえて、“彼が尊敬して止まぬお方”の反対にしたがって、新救貧法を撤回したと述べた。“尊敬して止まぬお方”とはベンサムとマルサスを意味する⁹⁾と解説している。

してみると、マルサスの『人口原理論』の主張はきわめて具体的なものである。イギリスを先頭にした18世紀の産業革命的胎動はマルサス時代の経済史的背景をなすものであったが、世人の目にうつった最大の問題は、この世紀の終末に累積した“貧困”の問題であった。この貧困の存在とその累積をいかに科学的に説明するか。それが初版『人口原理論』の中心課題なのであって、マルサスはこれを人口問題と結びつけて（人口を武器として）説明しようとしたのである。「イギリスにおける救貧法の歴史は……もし賃金が最低生活水準以下まで下落し続けたとすれば、手荒な調節が起こりうるであろう。18世紀末期および19世紀初期の行政官ならびに政府は、このような極端な“解決策”を避ける方法を見出すよう努力した。……マルサスの『人口原理論』第1版が公にされた1798年という年は、この問題について考える1つの転換点となった¹⁰⁾」ものなのである。だから『人口原理論』は少しも抽象的なものではない。

マルサスの著作をよく読むと「彼はやはり社会の発達段階を十分に意識しており、したがって近代の資本制社会では人口と生存資料との関係は別の形であらわれることを説いている。すなわち彼は“人口は生存資料によって制限せられる”という一般命題を、しばしば次のようにいい改めているのである。“人口の進歩は主として労働の有効需要によって規制せられる”あるいは、“人口は労働の実質賃金によって規制せられる”と。こうなると、マルサスのみた人口問題はけっして単なる食物の絶対量の問題などではなかったのである。“生存資料”をより近代的な概念におきかえれば、“経済”にほかならず、マルサスにおける人口問題は“人口対経済”の一般問題に発展する¹¹⁾」のである。

だいいち“道徳的抑制”というマルサスの人口理論の根本的テーゼは、資本主義体制そのものの改善を目ざす政策提案ではなかったか！ 社会将来の改善の唯一の道として提起した“道徳的抑制”案は立派な具体性をもった実施可能な——迂遠で困難な道とはいえ——人口政策ではなかったか。産業革命のあとに到来した暗黒面としての貧困問題，社会問題の解決策としてのマルサスの理論がどうして抽象的などといえるのだろうか。『人口原理論』は“国民の貧乏の原因に対する研究”と改題できる（J. ボナー）といわれている。どうしてそれを抽象的などといえるのか。

Ⅲ マルサス批判者らは，マルサス『人口原理論』を剽窃ないしは盗作と述べているものが多く，たとえばミックなどは『人口原理論』に対して“無恥で機械的な剽窃”（shameless and mechanical plagiarism¹¹⁾）という暴言を述べている。しかし，これら批判者の批判は，よく読んでみるとマルサスに対する認識不足に由来している。ボナーのいうとおり「“人口原理論”は，無からの創造物であるとの意味では独創的ではないが，『国富論』と同じ意味では独創的である。これら2つの場合，著者（スミスとマルサス）は彼の章句の多くのものを，さらに思想の多くのものさえもその先人たちからえたのである。しかし彼〔マルサス〕は，それらを先人たちがなしえなかったような取り扱いをしたのである。つまりマルサスは，先人たちの業績をそれらとの関連で，展望で，もっとずっと広い立場（wide bearings¹³⁾）でみたのである」からマルサスの『人口原理論』を剽窃とか盗作とは，むろんいいえないものであるし，ぜんぜん剽窃などではない。★

★ コッサ (L. Cossa) も「マルサスの学説は，その内容においても全体の立案および構成においても，真に独創的科学的な著作たるべき性質を付与している……マルサスの論文は今日に至っても，なお最終的解決をえそうにもない人口の経済問題に関する主要作品たることには変りがない」（『経済学史』関末代策訳，巖松堂，昭和5年，191ページ）と述べている。

確かに——マルサスの『人口原理論』は、その初版の表題をみてスグわかるように「ゴッドウイン氏、コンドルセ氏その他の諸著者の推論を論評して」社会将来の改善に対する人口原理の影響を論じたものであったし、マルサスは彼らの社会完全化主義を排撃するためには、マルサス自身の理論の多くの要素を論敵の所説のなかから借用しなければならなかったことも事実である。

しかし、これは（ゴッドウイン氏、コンドルセ氏その他の先人の諸著作を参照するということは）当然であって剽窃とか盗作ということにはならない。またマルサスが人口問題に関心をもった最初の人であったわけでもないことも事実である。人口問題は何世紀という間、政治経済上の論議でよく論ぜられたテーマの1つでもあった。西暦紀元前に編まれたという旧約聖書には、再三にわたって人口調査のことが書かれている。紀元前後のギリシア時代の哲学者やローマ時代の法典には人口が論ぜられているばかりかその法制が布かれている。しかし学問として人口が研究されたのは、17世紀ごろからといわれる。17世紀には、イギリスでは、いわゆる“政治算術”が発足して、ウィリアム・ペティ（William Petty 1623-87）やジョン・グラント（John Graunt 1620-74）が代表者となっている。この方向は18世紀にはブーアスミルヒ（Johann Peter Süssmilch 1707-67）によって新しい進展を遂げた。絶対国家は権力を求めて、富の生産のために人間を必要としたから、極めて積極的な人口政策を展開したのであった。だからマーカンティリストがこのテーマ（人口）について書いたものは無数に近くある。「いちばん強い印象を与える論者の1人は、ジョヴァンニ・ボテロ（Giovanni Botero 1544-1617）であって、彼はマルサスより、2世紀以上も前に、人間の無制限な生殖力に大地の限られた扶養力を対立させたのであり、これはまさしくマルサスのテーゼ¹⁴⁾」であったことは確かにそうである。★

★ ボテロは16世紀のイタリアの初期マーカンティリストの1人。『都市論』（1588）『国政論』（1589）などの著者。1617年6月23日トリノで死す。（73歳）。人間の生殖力は無限であるが、“栄養力”——それを生みだす土地の力や食糧を他国から集めてくる都市の力——には限度があるために現実の人口増加はその点でストップするという思想を展開した。マルサスに先立つ200年も前の時代にマルサスとほぼ同様の学説を唱えた人とふつうには考えられており、E. A. Fischerは“ボテロこそ人口理論の建設者である”と結論しているが、ボテロは人口を静止的に、あるいは消極的に捉えており、波動理論が全くない点に注意。

また「ジャマリア・オルテス（Giammaria Ortes, 1713-90）は人口増加が不変の増加率で幾何級数的にすすみ、手に入れることのできる食料の供給の上を越す傾向がある。だから、極端な貧困と悪徳を避けるためには、独身生活（celibacy）によらねばならないと主張したが、これもマルサスに先行した見解¹⁵⁾」である。★

★ オルテス、イタリアのヴェネチアの僧侶。経済的進歩が人口増大と同一歩調をとると説く。しかし彼にはマルサスのような人口の波動理論はない。しかしマルサスに先駆的な理論を述べた点で注目すべき思想家。

ケネー（F. Quesnay 1694-1774）は「よい政府のもとでも、わるい政府のもとでも、人口はつねに富を超過する。そのわけは生活資料の限界をのぞいては、繁殖に何の限界もなく、繁殖はこの生活資料の限界をこえてすすもうとする傾向をもつ¹⁶⁾」と述べた。★

★ ケネーはマーカンティリスト的人口思想の誤りを指摘し、逆に人口過剰が貧困の原因になると説く。“所得を超える人口”という表現を使って生存資料の存在量をつねにのり超えようとする人口増加の勢いのあることを示して、人口の過剰傾向の洞察と、その過剰傾向に結びつけられた社会大衆の貧困を説明した。

ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin 1706-90) は「人口の増加が入手し得る生活資料に依存するという事実を鋭くつかんでいた。しかし彼は、この観察をもっと具体的な面にまですすめて、都市の不利な条件に対立させて、農村の有利な条件を考え、また人口稠密のヨーロッパの不利な条件に対立させてはるかに有利な処女地アメリカの状態を考えた¹⁷⁾」のであった。

★ フランクリンには、1860年に刊行した「大ブリテンの利害の考察」(The Interest of Great Britain Considered) の付録の“人類の増加に関する観察”と題する論文がある。そのなかで「要するにうまく統制された国民は水蝗のようなものである。足をとればすぐお代りができるし、2つに切れればおのおのの不足の部分から成長してくる。このように余地と生活資料さえ十分なら、分割によって1匹の水蝗を10匹にすることができると同じように、1国民を同じく人口多くして有力な10の国民にすることができようであろう。というよりも国民を数においても力においても10倍にすることができよう」と述べ、人口増加力の無限増殖の傾向を説く。

こうみていくと、マルサスに先行して、類似した人口理論を述べた思想家が少なくないということは認めねばならない。だが、われわれは“単なる用語の一致や思想の部分的一致”があったからといって、マルサスを剽窃者呼ばわりしてはならぬだろう。考えてみると、マルクスがマルサスを批判して“盗作”とか“剽窃”と誹謗せしめるに至ったそもそもの理由は何なのか。この点についてボナーは「マルクスは労働者の状態の絶望的であることを証明したいのだ。マルクスはきわめてぬけ目のない (too acute) 男だったから、もし彼がマルサス学説の真理を認めてしまったら、また労働者が憤しむぶかい習慣〔道徳的抑制によって社会改善ができるということ〕をおこないうることを認めるなら——マルクスの証明が根據薄弱となることを察知したのである。これがマルクスがマルサスの『人口原理論』にたいして猛烈な攻撃をしたほんとうの理由¹⁸⁾」であると解説している。こ

れに対してR.L.ミークは「もちろん、剽窃（ひょうせつ）の疑いは、そこにその原文が実際に写されていない場合に、なるほどと思わせるのはひどくむずかしい。なぜなら、他人の著作の正当な利用と不当な利用、その良心的な利用と非良心的な利用との間の限界を、ハッキリと示すことは大抵の場合、そう容易ではないからである。しかしマルサスの場合には、彼の3つの主要な理論上の貢献——すなわち、人口論、地代論、および有効需要論——のいずれも、本質的には彼以前の作家によって前もって論じられていたものである。そしてこうした一連の合致が少くとも非常に疑わしいものであることは認められねばならぬ。第2に、マルサスの“科学に対する罪業”（sin against science）は、これまでに述べてきたように、彼の結論に、甚だしく¹⁹⁾弁護論的性格をもたせることとになった。マルクスがたびたび指摘しているように、マルサスの結論は大体において、労働者階級に反対して支配階級全体にくみするか、あるいは支配階級のうちのより進歩的な層に反対して、より反動的な層にくみするかのいずれかであった……これこそ、本質的に、マルサスの著作全体に対するマルクスの非難の要旨である」¹⁹⁾「マルサスの理論は、科学的な深さをもっているといえるほどのものではなく、徹頭徹尾虚偽をもって貫ぬかれておりながら、このような著しい影響をおよぼしえたということは、一体どうして起ったのであろうか。その主な理由の1つは、マルサスが記述し説明しようとした²⁰⁾実際の現象——すなわち労働人民の間にひろくゆきわたった貧乏と被救恤窮民——が、無視できない²⁰⁾真実の現象であって、それをどう説明するかがやかましく要求されていたからである」と述べ、「マルクスとエンゲルスにとっては、社会変動の基本法則を発見すること、とくにブルジョア社会の“運動法則”を発見することが関心事であったから、彼らにとっては、資本主義のもとにおける過剰人口のごとき社会現象を“永遠の法則”という言葉で説明することが²¹⁾浅薄で不適當だと思われたのは当然」²¹⁾なのだと結論する。

また市原亮平氏編著の『〈人口論〉と中国人口問題』では「マルサスの^{●●●●●}反動的人口理論は、すべて彼以前の反動的人口論の観点を剽窃し加工し、焼き直したものにすぎず、決して何か新しいものがあるのではない。マルサス以前にウォレス (Wallace. R. 1679-1771) が『古代および近代における人類の数に関する論争』のなかで、人口は幾何級数的に増加するという反動的論点を展開している。またイギリスの反動牧師タウンSEND (Rev. Joseph Townsend 1739-1816) は彼の書いた『1786年および87年のスペイン旅行記』のなかで、人口の増加は生活資料の増加に依存しており、人口の増加傾向は生活資料の増加を追い越すだろうという^{●●●●●}誤った理論を提起していた。これらすべてがマルサスの『人口論』の重要な内容を構成しているのである。この他にもマルサスは、大量にステュアート (Sir James Steuart 1712-80) の著書からの剽窃をおこなっている。ステュアートは、人口と生活資料のあいだには、一定の比例関係が存在しているが、人口の増加は富の増加より速いので、人口と生活資料のあいだの均衡は破られるのであると荒唐無稽にも考えている。したがって現在 (資本主義社会) では、“人びとはみずから求めて奴隷になるのだから、彼らは労働に従事することを余儀なくさせられている”。タウンSENDも“賃金労働者は常に飢えねばならない”という結論を引きだしていたが、労働者階級の永久化、これこそ人口原理のなしたものである。要するにマルサスはまったく^{●●●●●}剽窃の名人であったということである。そして彼の『人口論』は形而上学的観念的^{●●●●●}ごった煮料理なのである²²⁾という。

要するに、マルサスの『人口原理論』のなかには——先人の思想が混入しており——決して新しいものがあるわけではなく——マルサスの『人口原理論』はそれら先人たちの剽窃で、マルサス説はそれら先人たちの諸思想の“ごった煮料理”にすぎないのだという。

何たるバカげた批判であろうか。先人の業績を研究し、学びとり、参照して独自の思想を構成し著述することがどうして剽窃 (あるいは盗作) と

か“ごった煮料理”などといい切れるのか。論者たちは妄想患者の妄想のように反マルサスの妄想にとりつかれているのではないだろうか。妄想患者に説得療法は治療としては不可能ということは、現代の精神医学の常識だが——それではマルクスだって剽窃（あるいは盗作）といわれ、“ごった煮料理”といわれうることを知らしめれば、彼らのマルサス批判が誤っていたことを悟って戴けるかも知れない。そこで、マルクス学説が剽窃（あるいは盗作）とか“ごった煮料理”とかいわれている点を示すことにしよう。

平井 新氏はマルクス主義などは立派な“ごった煮料理”であるとして次のようにいう。「労働者が資本のために貧窮のどん底に追い込まれて、ついにいたたまれず、その社会にむかって死にもの狂いの反撃をいどむという思想もまた必ずしもマルクスの創見ではなく、すでにフランス大革命の時代に、バブーフ（Babeuf）という共産主義者によって、はっきりと道破されている。バブーフは“大衆があらゆる生活手段を失うにいたれば、自分のものと称すべき何物をも有せざるにいたれば……富者に対する貧者の暴動が免かれがたい必然性となる”といい、また革命は革命家のためにする弄火や偶然によって起るものではなく、貧苦と不幸の淵に陥った人民が最後にすがる窮余の血路である旨を述べている。彼〔バブーフ〕は“正義は勝つ”ことを確信して、この革命が必ず人民の勝利に終って大多数の不幸を絶滅するであろうとまで言明している。じらい同様の見解は、他の人びとにも見いだされる。マルクスの貧窮化説（die Verelendungstheorie 窮乏化説）は、これらの先人の所説を総合し、精練したものにほかならない²³⁾」のだし「共産党宣言時代のマルクスは、経済学の研究ではまだ初学課程にあって、もっぱらリカードに深く心酔していたので、しぜん、その貧窮化説（窮乏化説）も、また後年マルクス自身が排撃これつとめたリカードの賃金法則すなわち賃金鉄則に基礎をおいていたということである。〔ところが〕賃金鉄則はマルサス人口論に基礎をおくものであるから……

人口法則を基礎とする賃金鉄則を社会運動の據点とすることは明らかに矛盾²⁴⁾していることであると。

してみると、マルクスの窮乏化理論は、マルサス、リカード、ラッサールの理論の“ごった煮”であったわけである。

また、唯物史観について——平井氏はいう——「この種の経済的史観は、決してマルクスによって創唱された独特の着想でも何でもない。彼と同時代ならびにそれ以前の思想家によってすでに多かれ、少かれ明瞭に説かれていたところであって、マルクスこそ、かえって反対に、これらの人びとから多くのものを取り入れたくらいであるから、もしも経済的史観の先唱者をマルクスに与うるが如きことあらば、それは何かためにする人の故意の曲筆か、さもなければ史実にうとい人の錯誤であるか、いずれにしても、事実をまげるものといわなければならない……マルクスはフランス社会主義者の著作に、すでに展開されていた経済史観の思想に着目して、これを自家薬籠中に取り入れ、これを措辞行為において補綴整備し、醇化し敷衍（ふえん）したものであって、この限りにおいて彼の歴史観（唯物史観）は格別の異色のあるものとは思われ²⁵⁾ない」と。また剰余価値論にしても、水田 洋氏は「プルードンは、しかしながら、その最初の著作『財産とはなにか』(1840)がマルクスにおおきな影響をあたえた²⁶⁾」と述べ、プルードンの「財産は盗みである」の下記の1句を引用している。★

★ 近代的な財産の起源は、もっと重大なごまかしをふくんでいる。それは賃金労働者の雇用関係のなかにひそむ2重のごまかしであって、第1は生産手段をもつものともたないものとの雇用関係は、けっして対等で平等な契約関係ではなく、1方の他方への従属、したがって不平等な交換の関係である。この不平等による利益はしだいに蓄積されていって、両者の差は決定的になる。そこへ第2のごまかしがくわわる。それは巨大な資本の所有者が多数の労働者をやとるとき、協業による生産力の増大を、無償で手にいれるということである。なぜなら労働者1人にこのばあいに支払われる賃金は、その1人だけをやとったばあいと同一であるのに、協業の生産力は、労働者数の比率をはるかにこえて増大するからである。こうして資本の蓄積、生産手段の私有は、第1に労働者

を不利な立場におくことにより、第2に協業の生産力をだましとることによって、ますます盗みとしての財産の蓄積を促進するのだと、プルードンは考える。(高島善哉編『社会思想史概論』191ページ)

この1句にみられるように、マルクスの“剰余価値論”(これはマルクス学説の2大支柱の1つ)はプルードンの集合力理論の巧妙な応用なのである。坂本慶一氏はハッキリと「この集合力の理論は、マルクスの剰余価値理論に先行する内容をもつものとして、特に注目しなければならない²⁷⁾」と注意を呼びかけているし、それどころか、マルクスが誇りに宣言している“科学的社会主義”という用語についても「“科学的社会主義”という用語は、プルードンのものであることに注意されたい²⁸⁾」と注意しているのではないか! つまり“科学的社会主義”という言葉すらプルードンから剽窃したものなのである。ルフェーブルは、「プルードンは、たしかに彼の著作のうえからいっても、パリにおけるマルクスとの直接的な交渉のうえからいっても、マルクス主義思想の“源泉”の1人であった²⁹⁾」といい切っている。唯物史観の上部構造・下部構造という有名な定式化にしても——マクレランはあの定式化はフォイエルバッハからの借りものだ、と断言している。すなわちマクレランは「フォイエルバッハこそ、マルクスの最初の唯物史観の叙述と、そしてとくに“土台”の概念の定式化を助けた人である。フォイエルバッハが一般的用語で“自然”という土台と“精神”という上部構造として記述したものが、マルクスでは社会と国家になる——事実マルクスは市民社会を近代国家の自然的土台とした³⁰⁾」と述べている。してみると、唯物史観のあの有名な定式化さえもマルクスの独創したものでなく、フォイエルバッハの継承にすぎなかったのだし、それどころか、“疎外という哲学的概念”(Der philosophische Begriff der Entfremdung)にしても「マルクスはヘーゲルやシェリングさらにフォイエルバッハから借りてきたもの³¹⁾」であったというのではないか! だいいち、マルクスが非難している資本制社会そのものすら——クローチェによ

れば——「フランスやイギリスに歴史的に実在した社会ではなく、さらに西ヨーロッパまたはアメリカのもっとも進んだ国民の現実社会でもない。それは歴史的過程で絶対に実現されそうもなかった仮定から演繹された観念的形式的社会 (an ideal and formal society)³²⁾」だというではないか。ジイドにいたっては、「マルクスは労働価値説を形式的に受け容れたにもかかわらず——明示的ではないにしろ——価値が需要供給に依存することを認めざるをえなかった³³⁾」のだし「マルクス学説で——たとえば剰余価値論や剰余労働論は、労働価値説の単なる演繹にすぎないのだから、もともとの労働価値説が崩解すれば、マルクス学説そのものが崩れ去ってしまうことになる³⁴⁾」から、「マルクス学説がなしえたいかなるハッキリした貢献もわれわれは理解することは困難³⁵⁾」ということになってしまおうとさえ述べているではないか。

“ごった煮料理”などという駁論はどうもマルサスに向けられるべき言葉ではなく、マルクスご自身に向けられるべき言葉ではないのか。要するに「マルクスは、マルサスに反対する合理的な理論を何も展開していない³⁶⁾——というより理論的には反駁できなかつたのであって、それはマルクスが「マルサスの賃金法則を疑いもなく受けいれていることでも明らか³⁷⁾」なことなのである。だからマルクスとしては、ただ暴言で罵倒する以外どうしようもなかったわけである。つまりマルクスやエンゲルスのようなマルサス批判（剽窃論やごった煮料理論のこと）はご自分の弱点を隠蔽するための先制攻撃だったわけである。

ここでシュムペーターの言葉を書きそえてマルサスに対する剽窃（あるいは盗作）などという批判が愚かな批判であることを納得し反省して戴くことにしよう。

シュムペーターはいう——「マルクスはマルサスがアンダーソンを剽窃したと確信していたが、その理由についてはなんの実質的なものを挙げえなかった。この場合に、マルサスを剽窃者とするようなタイプの議論がも

しも許されるならば、それはマルクスをも同じく剽窃者たらしめるであろう³⁸⁾と。つまりマルサスを、もし剽窃者というならマルクスだって同罪になるぞ——ということである。

もう1つ。マルサス理論に対する“ごった煮料理”説に対しても一言、反論しておく。たとえば、カントはヘーゲルより早く死んだのだからヘーゲル哲学の完成した体系はカントは知らなかったのは勿論である。カント哲学はヘーゲルにつよい影響を与えたが、その逆ではなかったことはいうまでもない。だからヘーゲルの体系はカントやフィヒテやシェリングらから——つまり先行者や同時代人たちから多大の影響をうけたことは事実であるが、われわれはヘーゲル哲学をこれら先行者の集成だなどとはいえない。“ごった煮料理”とはいえないし、またいうべきではない。(ヘーゲル哲学を“ごった煮料理”などといえば、世人はその哲学的無知を冷笑するだけである。) 同じ意味でマルサスの理論 (=人口哲学) が先人たちの“ごった煮料理”などということは許されないのである。

Ⅳ 次に指摘しておくべき点は——『人口原理論』が人口を武器として人間歴史を解明しようとした歴史哲学の書物であって、彼が方法としているのは、人口の長期動態的發展理論 (これから歴史理解がえられる) のことであった。★

★ マルサスは『人口原理論』第6版第1巻第1章の冒頭で「本書の目的は……人間社会の開始以来 (since the commencement of society) の人口と食料の関係を取扱う」(An Essay, 6th. ed. p.5) と明記している。

確かにマルサスは、まず“公準”として「第1, 食物は人類の生存に必要であるということ, 第2, 両性間の情欲は必ずあり, だいたい今のままで変わりがあるまいということ」を前提して、この公準から出発して、次のように論断した。「人口の増加力は、人類のために生活資料を生産すべ

き土地の力よりも不定に大きい。人口は、制限せられなければ、幾何級数的に増加する。生活資料は算術級数的にしか増加しない」「人口は妨げられない場合には25年毎に倍加する」「次の25年間に生産物を4倍にできるとは考えられない」「人口増加は、兎の歩みのごとく、食糧増加は亀の歩みに比せられる」——と述べてはいるが、これは公準から推測すれば可能態として、そうだといっているのもであって、要は人口が“食糧増加以上に増加する傾向がある”——というテーゼをわかり易く示そうとしているにすぎない。ところが、19世紀において、マルサス死後、イングランド、ウェールズの人口と富の双方（両方とも）の大増加した点を指摘して、マルサス理論が“数学的”に正しくない——という反論をする人が少くない。ミークなどもエンゲルスの批判を借用して「マルサスは、彼がその全体系の基礎とした1つの計算を提出している。人口は幾何級数的に—— $1 + 2 + 4 + 8 + 16 + 32$ 等々と増加するのに、土地の生産力は算術級数的に—— $1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6$ と増加する。その相違は明白で恐るべきものである。だが“それは正しいか”（is it correct?）」「その正しさを論証しようとするマルサスの試みは大目に見ても、きわめて不満足³⁹⁾」と述べ「マルサスの“人口論”は徹頭徹尾偽瞞にみちている（through and through with fallacies）⁴⁰⁾」という。市原亮平氏編著の『〈人口論〉と中国人口問題』では「イギリスの反動牧師タウンSEND（1739-1816）は、人口の増加傾向は生活資料の増加を追い越すだろうという誤った理論を提起していた。これがマルサス『人口論』の重要な内容⁴¹⁾」などと述べているが——“算数”の計算からいえばマルサスの偽瞞ということになるのかも知れない。

しかし、この批判は人口学を少しも知らないことから起こっている批判である。マルサス人口理論は「操作的でない理論」（non-operational theory）⁴²⁾であって、歴史的に長期動態理論なのである。人口とは絶える間のない変動のなかにある有機的な集団のことなのである。だから「人口論において最終の発言をなすものは“歴史的次元”（die historische

Dimension) ⁴³⁾」でなければならず、「人口の歴史的経過と変動についても、これらの諸原因の1部は、生物学的なものもあろうが、大部分は社会学的な人間の態度に依存⁴⁴⁾」しているものであるから、決して正確に——“算数的に正確に”——人口が幾何級数的に増加するなどとマルサスはいつているのではない。人口は長期動態的に発展史的にみるべきものであり、ながいながい人口の歴史的考察のうえに立って、人口学が構築されるものなのである。だから食料が短期的にみて人口より急速に増加する場合があるのではないか——という質問に答えて小チャールズ・ダーヴィンはこう答えたそうである「よろしい。それでは、この理論〔マルサス人口原理論〕は長期の問題を取り扱っているのだ。100万年ほど待って、なにが起るかを見よ⁴⁵⁾」と。

これでわかるように——短い期間だけとって、その間の人口増加と生存資料との関係のみをみて、マルサスの人口法則が“算数的”に“それは正しいか”——などという批判は人口をご存知ない人の無邪気な質問にすぎないことがわかる。同じようにミークの「資本主義のもとにおいては、マルサス主義者のいう生活資料に対する人口圧迫ということは、ほとんど1つの神話にすぎない⁴⁶⁾」——という批判も、要するにほんの近年の1傾向をとらえたにすぎない発言で、人口学がよく理解されていないことから発した批判である。つまり長期的に歴史的に動態的に考察すれば——人口増加が食糧増加より速かなることは太古以来の歴史が明白に示していることである。★

- ★ 25年倍加説は、しかし全くの架空の想定ではなく『人口原理論』第2版第13章「以上の社会観察による一般的推論」で北アメリカ北部諸州が現実に25年で倍加した事実を統計的に示している。(第2版、吉田秀夫訳春秋社294ページ)

たとえば、「人間が1つの特別な種として存在するようになってから200

万年たったと推計されているが、このほとんどの期間を通じて、人間の数は何百万人という程度の少ないものであった。約12,000年前に農業が発達したとき世界人口はおそらく1,000万を超えてはいまいと思われ、今日のロンドンあるいはイラクの人口くらいであった。

約2,000年前のキリスト教時代の初期における世界人口は2億5,000万人と推計されるが、これは1974年のソ連人口とほとんど等しい。キリスト教時代の初期から産業革命の初期までに世界人口は10億に増加した。今世紀の初めには15億5,000万、1950年には25億〔1988年には50億、2000年には64億⁴⁷⁾〕というふうに、人口学は長期動態的に歴史的に観察することが必要なのである。しかも歴史的にみると「どんな前工業化時代も、食糧供給の変動による人口リズムから、まったく逃れることはできなかったのであり……これらの社会では少数の人びとがマルサスの危機の瀬戸際でかろうじて生存していた⁴⁸⁾」ことをまず銘記すべきである。「およそ1万2,000年前に農業が始められて以来、地球の食糧生産能力は数百倍増加した。それでもなお、飢餓は多くの人類の宿命として支配を続けている⁴⁹⁾」のだ。太古以来、人類は食料不足に悩み続けてきたことを忘れないで貰いたい。近年の短期間の人口対食料の差をとって、マルサスの理論が“算数的に”合うとか合わぬとかいうことは、全くマルサスの提唱していることが理解されていないからである。こうして、こんにちわれわれは「マルサスの所論に賛成するものも反対するものも、人口動向について十分な知識を習得する必要があることを痛感し、また人口と経済的・社会的条件との関係について慎重な研究を行うことが必要であることを悟った⁵⁰⁾」ようなわけで——マルサスの所論が“算数的に合うとか合わぬ”とかいう反論は初めから人口学がわかっていない——ということにすぎない。国連の報告でも「紀元元年ごろの世界人口は約2億5,000万人と推計されており、世界人口の増加は長期間にわたってきわめて緩慢であった。増加のテンポが速まってきたのは、18世紀の半ばに産業革命が起こったころからである。1650年の世界人

口は5億4,500万人で、それまでの1650年間の平均増加率は0.04%にすぎなかったことになるが、1750年には7億2,600万人になり、この100年間の平均増加率は0.29%となって、それ以前とくらべて格段に高くなった。しかしそれ以後は、第1次人口爆発 population explosion と称せられる人類の大増加の時代にあたり、世界人口は1850年に11億7100万人、1940年に22億1600万人に増加する結果となった……産業革命以後の世界人口の爆発的増加の中心が先進工業国であったのに対して、戦後の人口爆発が開発途上地域を中心として起っていることはきわめて重要な違いであり、同じく人口増加の問題ではあるにせよ、その意味において格段の違いがあることに注意すべきである⁵¹⁾」となっており——この報告で明らかのように、人口はまず(1)歴史的・動態的にみるべきものであること〔しかも産業革命の前と後とでは増加率が決定的に違う〕、(2)地域においても増加率が違うし、いちがいに人口増加といっても“質”の問題もあわせ考うべきこと、(3)人口は幾何級数的、食糧は算術級数的という表現は決して“算数”の答えのように正確にそうなるもの——というわけではないことを覚えておくべきである。マルサスは予言者ではない。わが国の1920年以降の人口趨勢をみても「大正中期の1920年頃から出生率は近代的な低下をはじめ、第2次世界大戦によって混乱をうけ、終戦直後のベビーブーム期には33-34%に上昇し、1950年以後先進国に例のないほど急激に低下し、55年頃からは低下は緩やかとなった。1966年には丙午の迷信によって、13.8%という人口動態統計史上、最低の出生率を示し、翌67年には、その反動で19.4%に上昇した。その後はやや上昇傾向を持続したが、最近ふたたび低下傾向に転換⁵²⁾」しているというような状態で、短期的にみれば、人口は必ずしもマルサスのいったように幾何級数的に正確に殖えているわけではない。（丙午のような迷信でもこんなに出生率の違いがでてくる。）しかしこれは当然のことであって、別にマルサスがウソをついているわけではない。人口というものは、長期動態的な変動する有機体のことであるから、これを短期

的に分析して“算数的に”合うとか合わぬとかいう人の方が人口学を理解していないのである。マルサスが“もし、制限されなければ”（もし、妨げの作用が働かないならば）ということは、沢山の“妨げ”の要素があるぞ——ということなのである。

V 次に指摘しておきたいことは——前記のマルサス批判者らは『人口原理論』を単純に“人口”を論じた著作であると錯覚していることである。（これは大きなマチガイである。）マルサスの『人口原理論』の匿名の初版（1798年マルサス32歳時の著作。彼が22歳でケムブリッジ大学を卒業してから10年後になる）の序文で、彼は「この論文はもとゴッドウィン氏の『研究者』Enquirer中の論文Mr. Godwin's Essayの問題すなわち貪欲（どんよく）と浪費とについて、私が1友人と交換した会話に由来するものである。この議論は社会将来の改善に関する一般的な問題を提起するに至った」（初版『人口の原理』高野岩三郎、大内兵衛訳 昭和25年、岩波文庫版11ページ）と述べているので明らかのように、マルサスの最初の着眼は人口問題そのものよりも“社会将来の改善”という当時の時事問題であったのであり、また『人口原理論』の第2版以降の副題はすべて「人類の幸福に対するその過去および現在の諸影響」という側面から観察されるものであることが明示されているから——『人口原理論』の主目的は“人口”を手段として人間歴史の解明に向けられていたものと考えべきものなのである。第2版（1803年）の序文では「議論を進めていくうちに私はおのずから現存社会状態におよぼすこの原理の結果の考察へと導かれた。……この論文（初版のこと）が喚起した社会の注目程度に鑑みて、私は、私の余暇の読書を過去現在の社会状態に及ぼせる人口原理の結果の歴史的検討に費すことに決心した」（神永文三訳『人口論』世界大思想全集18 春秋社、昭和2年、1ページ）とハッキリ書いている。この第2版は1803年6月（マルサス37歳時）公版されたものであるから彼が東印度大学の教授（経済学と近代史の講座

担当)に就任(1805年暮)する2年前のことである。B.ラッセル(イギリスの大哲学者)などは明確に、マルサスは「たんなる論証の武器(mere weapon in augument)⁵³⁾」として“人口”を用いたと断言している。だから『人口原理論』は「人口問題を自己目的としてあらゆる側面から照明しようとした概論書ではない。照明の対象はむしろ人口問題ではなくて社会問題であり、その照明の手段が人口の原理であった。この原理によって社会問題は其の解決の可能性にむかって探究された⁵⁴⁾」ものなのである。『人口原理論』はけっして人口について述べた書物ではなく、人口を手段として人間歴史を照明しようとした歴史哲学の書物なのである。前記の批判者らは全くこの点を見落している。マルサスの『人口原理論』は3つの視点から考究されるべきもので、「A.人口問題そのものの見方 B.人口の運動(波動)に関する原理的な考え方 C.歴史過程としての人口波動思想⁵⁵⁾」であるが、前記マルサス批判者らはAの部分のみの批判に汲々としてB,Cを見落している。

これではマルサス批判としては不十分ではないのか。

マルサスは大学生生活の終り頃(マルサスは1784年、18歳時にケムブリッジ、ジーサスカレッジ Jesus College, Cambridgeに入学し、1788年22歳時に卒業している)以降、歴史学に興味を抱き始め、1788年4月17日付の父あての手紙ではギボン(E. Gibbon 1737-79)の『ローマ帝国衰亡史』The History of the Decline and Fall of the Roman Empire(第1巻は1776年2月出版、第2第3巻は1781年出版)を読んで深い感銘を受けたことを報告しているが——彼は人間歴史の見方について——“人口増加”という根本事実から人間歴史を解明するという彼独特の見地を持つにいたった。とくにギボンの『衰亡史』(邦訳第2巻)はアジアおよび北欧諸民族の大移動を描いたものであるが——このところに食糧と過剰人口の関係からの詳細な解説がある——これがマルサス人口史観形成の萌芽となったものである。その後(ギボンによって歴史学に興味づけられたあと)、歴史学を研究し

ていくうちに、イタリアのヴィーコ（Giambattista Vico 1688-1744. 歴史哲学の創始者）の『新しい学』を読んで近代歴史学を知る。★

★ 歴史を作ったものは人間である。だから人間は常に歴史のなかにいる。人間は歴史的存在である。したがってまた、この作ったものの過程を把握し叙述する存在でもある、この“相対的なものの絶対化”それが歴史哲学である。人間の歴史がある目的、終末へ向って必ず進んでいくという進歩、発展的史観をもつ場合には、ある特定の前提が必要となってくる。一時代、一文明のもつ個性を認めて、それを前提したものから辿ってみる必要がある。いいかえると歴史における客観的法則性を認めて、歴史の流れの動力としての起動因を何に求めるかということによって歴史観がえられる。マルサスは歴史の動因を人口原理に求めた。

歴史学というものは「まず certum（個々の事実を知りそれを信ずること）から始めて verum（普遍的真理）に達するもので、それには、歴史上の事実について若干の命題を構成し、しかもその命題が先験的真理（a priori truth）〔原理〕から出発していなければならない……それではじめて“学”となるものである⁵⁶⁾」という verum-factum（真なるものは、作られたもの）の公式に従って先験的真理を考究した。★

★ 『新しい学』においてヴィーコはいう——「これらの公理は、あたかも生物の体内を血液がめぐるように、諸民族共通の本性について、この“学”が説明していることの全体を貫流して、これに生命を与えてくれるはずである」〔119〕「この真実の根拠を探し出すことがこの“学”のもう1つの大きな努力目標である。だが真実は年月の流れや言語風俗の変遷によって、偽りのヴェールに隠されてしまっている」〔149〕（『新しい学』『世界の名著』33『ヴィーコ』清水幾太郎編、中央公論社、昭和54年）

だから『人口原理論』の初版（1798年、マルサス32歳時）の第1章では「私は2個の公準（postulata）を置くことは正当に許されると考える。

第1、食物は人類の生存に必要なであるということ。

第2, 両性間の情欲は必要であって, 大体いまのまま変りがあるまいということ」(初版『人口の原理』前掲書29ページ)——と述べて, 2個の“公準”(postulata)を設定しておいて, 第2版(1803年マルサス37歳)の序文で「初版が喚起した社会の注目程度に鑑みて, 私は, 私の余暇の読書を過去現在の社会状態に及ぼせる人口原理の結果の歴史的検討に費すことに決心するにいたった」(前掲)と述べたのである。繰り返していうと——2個の公準が“あたかも生物の体内を血液が循環する”ごとく, 2個の先験的真理から歴史を解明しようとする決意を抱いたのである。

それでは, “人口原理の結果の歴史的検討”とってマルサスは何を意図していたのだろうか。これがBの問題である。

1826年(マルサス60歳時)の『人口原理論』(第6版)の有名な3命題「1)人口増加は必ず生存資料によって制限される。2)人口は, 有力かつ顕著な妨げによって阻止されない限り, 生存資料の増加する時にはつねに増加する。3)これらの妨げ, および人口を生活資料の水準に抑止する妨げは, 道徳的抑制, 罪惡および窮乏である」(第6版, 第2編第13章邦訳360ページ)——から人口原理が増殖原理と規制原理であることがわかる。3)は, この2原理の均衡(相互関係)を示したものである。何となれば「人間は食物なしで生きることができないということは天性の法則」(第4版付録。吉田秀夫訳, 春秋社273ページ)であるから, これは始源, 第1のもの=原理である(規制原理)。しかも, これは「人口増加は必ず生存資料によって制限せられる」(第1命題)といい換えることができる。第2)命題については「両性間の情欲はあらゆる時代においてほとんど同一であるから代数の用語でいえば, 与えられた量と考えられ」(第2版, 吉田訳313ページ)うるし, われわれの實在は父母の情欲の結果であるからこれも始源, 第1のもの=原理である(増殖原理)。つまり証明無用の先験的真理である。第3)の命題は, この2原理の均衡にいたる妨げの作用を述べたものである。すなわち規制原理は——人口と生存資料との関係において——人口増加が生存

資料の水準にひきおさえられる作用としてあらわれ、他方、増殖原理は、人口の増加がたえず生存資料の水準を圧迫し、その水準をのりこえようとする激しい力として作用していることを示す。

つまり人口と生存資料とのあいだの緊密な交互作用の関係が原理的なものとして述べられているのである。してみると——ヴィーコのいうように——原理を設定して“学”を構成していることになる。★

★ 『新しい学』においてヴィーコはいう——「数限りないさまざまな諸事象の起源を論ずるにあたって、本「学」はこれらの原理にもとづきつつその所論を展開する」〔332〕「諸民族の世界が人間によって創られたものであるならば、人間はいかなる点で常に一致してきたか、また今もなお一致しているかを、我々を知ることができる……この永遠にして普遍的な原理は、あらゆる民族が生れ存続する基盤となっているものであり、またあらゆる学問に妥当する原理でもあるはずである。〔163〕清水幾太郎編「ヴィーコ」（『世界の名著』前掲書166-7ページ所収）

次に、この2原理は定立と反定立であるから人口運動としては歴史の流れのなかで交錯によって波動が生まれる。★

★ 波動とは——「人口が増加のスタートを切るときには、その増加分を扶養しうる経済的生活空間が拡大されていなければならず、反対にもし経済的生活空間がなんらかの出来事によって縮小でもきたすならば、人口はたちまち増加を停止して減少の運動を起さざるをえない。このようにして人口がそれを支え養う経済的生活空間との関係において、一定の周期をえがきながら増加と減退との変動過程をあらわすことを人口波動とよぶ」（『人口大事典』平凡社、昭和32年115-6ページ、）

人口がつねに経済的生活空間との関係において“波動”をあらわすものであるかぎり、人口の波には、さまざまな歴史的あるいは社会経済的な諸原因の変動が結びついているものであるから“波動”は、人口と生存資料との均衡——均衡破壊——均衡回復という運動過程をあらわすものである。

（その場合、規制原理はつねに均衡化的に作用するし、増殖原理はつねに均衡破壊的に作用する。）つまり前記の第2命題の——“人口は、有力かつ顕著な妨げによって阻止されない限り、生存資料の増加する時にはつねに増加する”——は人口の進転運動である、しかしこの運動はやがてまた規制原理によって次の均衡破壊を準備することになる。こうして人口は進転と逆転とをいいかえると上昇運動と下降運動を周期的に反復することになるのである。

マルサスは、この“波動”理論（人口動態的交替法則または人口波動法則）から歴史を究明することを志向したのである。前記の“人口原理の結果の歴史的検討”とは、この検討のことなのである。いま“人口様式”を“その時代の特色的な人口要因の組合せ”と規定するなら——“人口様式はその時代の人口の全体としての繁殖態度——何ほどの人口増加をきたすか、それとも人口減退をもたらすか——のその時代の態度様式”ということになるから“人口原理の結果の歴史的検討”が可能になるわけである。だからマルサスは第6版（1826年、マルサス60歳時）の第1編第2章では「こうした研究〔歴史研究〕の進歩によって、われわれは人間社会の内部構造を一層はっきりと洞察できるようになることを期待してよい」（*An Essay*, 6th. ed., Book I. Chapt. II. p.17. 第6版第1篇第2章，邦訳15ページ，中大出版部刊）と述べ、さらに第2篇第13章の「上記の社会観察からの一般的推論」（*General Deductions from the Preceding View of Society*）で3命題を結論して——「したがって、人類の歴史を注意深く吟味するものは、これまで人間が生存し、あるいは現在も生存しているどの時代、どこの国においても次のこと〔3命題が歴史的に妥当していること〕を認めざるをえないのではなかろうか」（*An Essay*, 6th. ed., Book II. Chapt. XIII. p.314. 邦訳360ページ）——と述べて、マルサス独特の歴史観（人口波動法則による歴史理解）の分野を開拓しようとしていたのである。

前記マルサス批判者らは、このマルサスの人口史観（『人口原理論』のもっとも核心的な歴史的な部分）を全く見落している。マルサス理論の十分な理解なくして——ただ罵詈雑言をもってマルサスを批判しようとする前記マルサス批判者らの批判は説得力に乏しいものといわざるをえない。

- 注 1) J. K. Ingram, *A History of Political Economy*, Augustus M. Kelley Publishers, 1967 p.116. 傍点引用者
- 2) C. Gide & C. Rist, *A History of Economic Doctrines*, George G. Harrap & Co. LTD. p.142-3.
- 3) *ibid.*, p.142.
- 4) 南 亮三郎『人口理論と人口問題』千倉書房, 昭和10年, 226-7ページ。
- 5) 大河内一男『続社会思想史』有斐閣, 昭和44年, 52ページ。
- 6) J. Bowen, *Economics and Demography*, Studies in Economics: 10. edited by Charles Carter, George Allen & Unwin Ltd. 1976. p.84.
- 7) J. Bonar, *Malthus and His Work*, *op. cit.*, p.29.
- 8) *ibid.*, p.43.
- 9) *ibid.*, p.44.
- 10) I. Bowen, *Economics and Demography*, *op. cit.*, p.84.
- 11) 南 亮三郎『人口思想史』千倉書房, 昭和47年, 140ページ。
- 12) R. L. Meek, *Marx and Engels on Malthus*, Lawrence and Wishart, 1953, p.23.
- 13) J. Bonar, *Malthus and His Work*, *op. cit.*, p.32-3.
- 14) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, Oxford University Press, 1962, p.85.
- 15) *ibid.*, p.85.
- 16) *ibid.*, p.85.
- 17) *ibid.*, p.85.
- 18) J. Bonar, *Malthus and His Work*, *op. cit.*, p.391.
- 19) R. L. Meek, *Marx and Engels on Malthus*, *op. cit.*, p.23. 傍点原著者。
- 20) *ibid.*, p.24. 傍点原著者。
- 21) *ibid.*, p.25.
- 22) 市原亮平編著『〈人口論〉と中国人口問題』晃洋書房, 1981年, 21ページ 傍点引用者。
- 23) 平井 新『社会思想概論』, 昭和28年, 壇 書房, 388-9ページ 傍点原著者。

- 24) 同書 390ページ。
- 25) 同書 327-8ページ。
- 26) 高島善哉, 水田 洋, 平田清明著『社会思想史概論』岩波書店, 1976年, 191ページ。
- 27) 坂本慶一『マルクス主義とユートピア』紀伊国屋新書B-40, 1972年, 136ページ。
- 28) 同書 124ページ。
- 29) H. Lefebvre, *Pour connaître la pensée de Karl Marx*, Edit BORDAS, 1947 p.121-2. 『カール・マルクス』吉田静一訳, ミネルヴァ書房, 175ページ
- 30) D. McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, Macmillan and Co. LTD. 1969. p.112.
- 31) E. Mandel, *Entstehung und Entwicklung der ökonomischen Lehre von Karl Marx*, *op. cit.*, S.23.
- 32) B. Croce, *Historical Materialism and the Economics of Karl Marx*, George Allen & Unwin LTD. 1922. p.50.
- 33) C. Gide & C. Rist, *A History of Economic Doctrines*, *op. cit.*, p.475.
- 34) *ibid.*, p.476.
- 35) *ibid.*, p.476.
- 36) B. Russell, *Freedom and Organization (1814-1914)*, *op. cit.*, p.232.
- 37) *ibid.*, p.232.
- 38) J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Oxford University Press, Eleventh Printing, 1980. p.481.
- 39) R. L. Meek, *Marx and Engels on Malthus*, *op. cit.*, p.13.
- 40) *ibid.*, p.24.
- 41) 市原亮平編著『〈人口論〉と中国人口問題』前掲書21ページ。
- 42) I. Bowen, *Economics and Demography*, *op. cit.*, p.80.
- 43) G. Mackenroth, *Bevölkerungslehre*, Springer-Verlag, 1953 S.111.
- 44) *ibid.*, S.111.
- 45) I. Bowen, *Economics and Demography*, *op. cit.*, p.81.
- 46) R. L. Meek, *Marx and Engels on Malthus*, *op. cit.*, p.44.
- 47) L. R. Brown, *In the Human Interest*, *op. cit.*, p.20-1.
- 48) E. A. Wrigley, *Population and History*, World University Library, McGraw-Hill Book Company, 1969 p.113.
- 49) L. R. Brown, *In the Human Interest*, *op. cit.*, p.43.
- 50) 岡崎陽一「人口問題の現段階と将来」(『人口論』青林双書, 昭和53年, 222ページ所収)
- 51) 岡崎陽一「人口」(『経済学大辞典』第2版, 1. 東洋経済新報社, 昭和

- 55年, 3-4ページ所収)
- 52) 山口喜一「人口の静態と動態」(『人口論』前掲書62ページ所収)
 - 53) B. Russell, *Freedom and Organization*, *op. cit.*, p.94.
 - 54) Budge, S. *Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz und die theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte*, Karlsruhe, 1912, S.6.
 - 55) 南 亮三郎『人口思想史』前掲書137ページ。説明の都合上, 表現をA, B, C,に改めた。
 - 56) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*, Mouton & Co- 's-Gravenhage 1962, p.100.